

VI 置塩城跡の調査結果と保護対策

調査者（鶴田 誠・宮田和男・安田邦男・鳥越 茂・山岡秀行）

1 要 旨

平成 26 年 8 月 5 日に調査を行った結果から、特徴と問題点を上げると次のようである。

- ①展望ポイント九丁：登って来た高さを確認する最高の場所であるが、見晴らせる角度が狭いので、高さ 2m ぐらいで伐り、枝葉は樹木の上に寝かせておく。コバノミツバツツジが多く生育しているので、保護して春の花を楽しめるようにする。
- ②展望ポイント二の丸：ヤブツバキの群落があるので、周囲の常緑樹を約 1/2 伐採する。大径木も多数あり、枝抜き剪定を実施して花の数を増やすようにする。
- ③展望ポイント本丸南：展望角度の拡大と高度感覚を実感させるために、地上約 2 m で断幹してギャップを広げる。
- ④展望ポイント本丸北：夢前川沿いに北方向の展望が良いが、ギャップにはタラノキ 1 本だけで木本植物は見られず、土壌の流出が危惧されるのでヤブニッケイ、シロダモ、ヒサカキ、ウリハダカエデ、ソヨゴなどを導入することが望まれる。
- ⑤展望ポイント本丸中：置塩城址の特徴は多数の曲輪の集合体として構成されている城郭である。しかし、一望できるポイントが無いので、その地域にある樹木を間伐または断幹して眺望できるようにすることが望まれる。そのことによって 2 ～ 3 月にはヤブツバキ、4 月にはヤマザクラを本丸から眺めることができる。

2 はじめに

置塩城跡は姫路市夢前町宮置・糸田にまたがる山地で約 5 ha の広さがある。夢前川中流域の左岸（東岸）に位置し、最高峰は城山（置塩山）である。登山口の標高が 50m、主郭であるⅡ-1 曲輪が 347m、一番高いⅠ-1 曲輪で 370m（すなわち城山山頂）ある。直線距離 500m で標高差 300m をジグザグの急勾配の登山道を登らなくてはならない。この間を 1 丁ごとに 18 の丁石が建てられており、登山（城）客の目安となっている（図-1）。1 時間弱かかるこの間は、1ヶ所を除き眺望は全く効かない。登山口近くの山脚部や急登山道周辺には城跡・城郭と考えられるものは何も無く、山頂部や尾根上部に多数の曲輪が存在する。石垣は最大のもので高さ 2 m 以下であるので、石垣保全という事は考える必要はない。また土塁跡は高さ 30cm 程であるが存在する。主郭には少数であるが瓦が散在する。

3 現地調査

(1) 調査日

平成 26 年 8 月 5 日



写真-1 II 曲輪のヒノキ人工林



写真-2 II 曲輪のヤブツバキ群落

(2) 調査方法

調査者 5 人で急な山道を喘ぎながら、周囲の植生や特筆すべき見所や課題などを検討しながら登った。置塩城跡は中世の山城としては多数の曲輪群を持つ特徴があるので、これを実感するにはどうすればよいか、特徴ある眺望を確保して、なおかつ地表流亡をおこさせない剪定方法を考え、実行しながら検討した。

(3) 調査結果

丁石の九丁（山腹の半分）までは、40～50 年前まで薪炭林として利用されていた。と考えられるのは、株立ちのコナラ・アベマキ・アラカシが多数見られるからである。また上部の主林木と比べ、樹幹直径が小さい。上木には少数ながらコジイが見られる。中木にはヒサカキ・ヤブツバキ・ソヨゴが見られ、見通しは効かず暗い。そのため地床植物は極少ない。なお、登山口から約 300m 南側の櫃倉（きくら）神社の後背部には数多くのコジイがあり貴重な純林を構成している。

丁石の九丁より上は、人為での利用はこの 60 年間ほどは利用されておらず、コナラ・アラカシの大径木が多い。カシノナガキクイムシのフラスも多数見られる。数は少ないがヤマザクラの大径木も見られる。上木が優勢なためか、中木のヤブツバキ・ソヨゴ・ヒサカキは劣勢で、そのため地床植物がかなり存在し地面の露出度は低い。林内の見通しもかなり効く。

山頂の曲輪部では、一部はヒノキの人工林があるが、間伐が充分にはなされていない。しかし、林内が真っ黒という訳ではない。これは急傾斜の山頂部にあることで、夕日の斜入があるからと考えられる。その他高木ではコナラ・ノグルミが見られ、



写真-3 II曲輪のヤマザクラ大径木



写真-4 II曲輪のワラビと土塁跡

特筆すべきはヤブツバキの高木（樹高約 5m）の群落があることである。またヤマザクラ（幹周 3 m・樹高 12m）の大径木も多数ある。地床植物は草本があるが密ではない。明るい所ではコシダ・イワヒメワラビ？・イタチハギ・ススキ・ササ・タケニグサが見られ、木本ではタラノキ・アカメガシワ・ヌルデなどが見られる。

城趾全体を見て下層植生に大きな影響を与える鹿害は現在のところは少ないと判断される。登山口近辺では鹿の糞を少数見たが、上部では見当たらなかった。しかし、曲輪部で見た地床植物のイタチハギ・タケニグサ・タラノキ・イワヒメワラビ？などは、シカの嫌う植物である。これらが繁茂していることは、シカの活動地域であると十分認識しなくてはならない。

4 とくに現状の眺望について

急登山道の中程、九丁の丁石の手前に南南西に開けた所（眺望ポイント九丁）がある。このギャップは 10 年程前の強風で杉林が倒れた跡と考えられる。夢前川や書写山が遠望でき、書写山ロープウェイの中間の支持柱も、地元の置塩小学校の校舎も見



写真-5 ギャップからの眺望



写真-6 剪定後の眺望

える。急登の中間地点にあり、一休みには好適なポイントである。間口（横幅）10m 長さ（傾斜方向）20m 程のギャップである。明るいギャップにはコバノミツバツツジが多数存在し、コシダ・ソヨゴ・コナラの幼木も見られる。

置塩城の最後の城主赤松則房は「置塩城跡総合調査報告書」（平成14年3月兵庫県飾磨郡夢前町教育委員会）によれば、Ⅱ-Ⅰの曲輪（眺望ポイント二ノ丸）に住居したらしい。しかし、平成25年度の姫路市の補助事業で、置塩小学校校区の連合自治会により「地域夢プラン」により整備された案内板や立札はⅠ-1の曲輪を本丸跡としている。実際こちらの方が標高も高く眺望を得るには好都合であったのであろう。この本丸跡からは南と北に眺望ポイントが補助事業で、ともかくも整備されている。

眺望ポイント二ノ丸からは、遠方の眺望は全くない。しかし、ヤブツバキの群落や大径で高木のヤマザクラが見られ、植物観察スポットとしての価値は高い。また土塁跡も容易に観察できる。

（眺望ポイント本丸南）南やや西寄りには遠く家島群島の男鹿島・家島本島が、手前には新日鉄広畑工場が見える。さらに手前には同標高の書写山が、北面する国有林の杉林の梢がはっきり見える。真南には特徴ある朱色の屋根のヤマサ蒲鉾の工場が、



写真-7 眺望ポイント本丸南の現在の眺望



写真-8 眺望ポイント本丸北の眺望



写真-9 眺望ポイント本丸北の植生

その背山越しには姫路市街そして飾磨港が見える。残念ながら姫路城は、手前左の広峰山西方の 302m の山並が邪魔して見えない。本丸跡の端にある高木のコナラを残してギャップを構成しており、景観的には良好であるが、やや間口（眺望角度）が狭い。

（眺望ポイント本丸北）北向きには、夢前川の上流部が望めるよう眺望ポイントが整備されている。特徴ある 667m の明神山・塩田温泉・前之庄の市街や中国道が見える。しかし、なぜかこのギャップには草本しか見えず強雨時のエロージョンが心配である。また置塩城趾は多くの曲輪が存在することが特徴となっているが、これを俯瞰するポイントがない。現状では宝の持ち腐れである。

5 対策

各眺望ポイントについて、樹木医・みどりのヘリテージマネージャーとしての改善策を提案する。

(1)「眺望ポイント九丁」 連続する急な登山道途中の休息ポイントで、汗を拭き、一息入れ、登ってきた高さを確認するに最適である。しかし見晴らせる角度が少し狭い。右手（西）方向にもう少し広げたい。その際には、いたずらに地際から伐採せず、高さ 2 m 程度から伐り、地表面を露出しない。また伐った樹木上部は近くに寝かせておく。これは余分な草本の繁茂を抑制することと、将来増えると思われる鹿害を防ぐ狙いである。またこの場所はコバノミツバツツジが多いので、選択的にこれを残存させるようにすれば、春の一月間は赤い絨毯の向こうに書写山が眺められるという絶好のカメラポイントとなろう。なお二、三脚のベンチが欲しい所である。なおコバノミツバツツジは既往の資料によれば、シカの嗜好ついて好き・嫌いいずれの記載もない。激害になれば食害の可能性はある。

(2)「眺望ポイント二ノ丸」 前述のようにヤブツバキの、しかもかなりの高木の群落がある。開花量を増やすために、周囲の常緑樹の約半数を伐採する。ここでは

根元から伐倒する。また、大径木のヤマザクラ（シカの大好物）も多数存在する。周囲からは樹高は抜きん出ているので、日照は問題ない。ただ枝が込み合っているため、枝抜き剪定を実施する。これらの処置により、ヤブツバキもヤマザクラも花数は増すであろう（図-2）。

(3)「眺望ポイント本丸南」 眺望角度を広げるため、また高度を視覚的に実感させるために、もう少しギャップを広げる。ただし、俯瞰するのであるから根元から伐採する必要はない。地上高2mで十分である。また本丸の縁にある枝下の高い高木については、俯瞰するには邪魔にならない（現状の樹幹間隔5m・枝下高3mあれば十分）ので、そのまま残す。高度を感じるためには真下を見せる必要があるため、現在のギャップの先端部を広げる（下へ伸ばす）。この場合も地上2mで伐ればよい。剪定した梢頭部もその場に置けばよい。これらの処置により裸地化せず、土壌流亡は起きない。また萌芽枝へのシカの食害を少なくできる。

(4)「眺望ポイント本丸北」 このポイントからは夢前川沿いに北方向の眺望としては十分満足いくものである。問題は現状のギャップにはタラノキ1本を除いて木本植物が見られないことである。斜面のイタチハギの群落を少し調べたが、高木の稚樹は見られなかった。精密な調査をして、もし稚樹がないならシカが嫌うヤブニッケイ・シロダモ・ヒサカキ・ウリハダカエデ・ソヨゴなどの幼木移植か人工播種をしなければならない。このままでは強雨による土壌流亡が心配である。

(5)「眺望ポイント本丸中」 置塩城趾の他にない特徴は多数の曲輪の集合体として構成されている城郭であることである。しかし、それを一望できるポイント



写真-10 眺望P本丸中を遮る立木

がない。「置塩城趾総合調査報告書」には精密な測量がされており、本丸の標高が369.99m、二ノ丸は345.51mとなっている。両者の距離は165mであり、幸いなことに間には333mの鞍部（I-10曲輪）があり、谷間越しに対岸を望む地形となっている。本丸のすぐ下のI-6曲輪は355mであり、ここの樹高を10m以下にするとII-4曲輪が見えることになる。IV-1曲輪も含む眺望を確保するためには、広角50度でI-6曲輪までで約500㎡の地域を樹高制限すればよい。もちろん本丸

のすぐそばでは、枝下から俯瞰すればよいので高木を伐採する必要はない。ただ見られる側のⅡ・Ⅳの曲輪側でどの程度伐採すればよいかは、現地での測量が必要となる。そうすれば、2～3月のヤブツバキ、4月のヤマザクラを本丸から眺める殿様気分が味わえるのではなかろうか。

6 おわりに

以上のような対策を実施すれば、かなりの高木を残して地表植生を保全しながら、また山腹（城趾）を壊すことなく新しい眺望を提供でき、置塩城趾の価値を高められるのではないだろうか。地元では置塩城趾への関心は高いが、標高差 300m の急登を要するので、11 月の置塩祭り以外の登城者は大変少ない。眺望を確保し、曲輪群や珍しい花木を美しく見せることにより、リピーターを増やし、中世の文化財への関心を高めることに繋がるのではないかと考える。



縮尺：1/5,000

図-1 置塩城跡とビューポイント

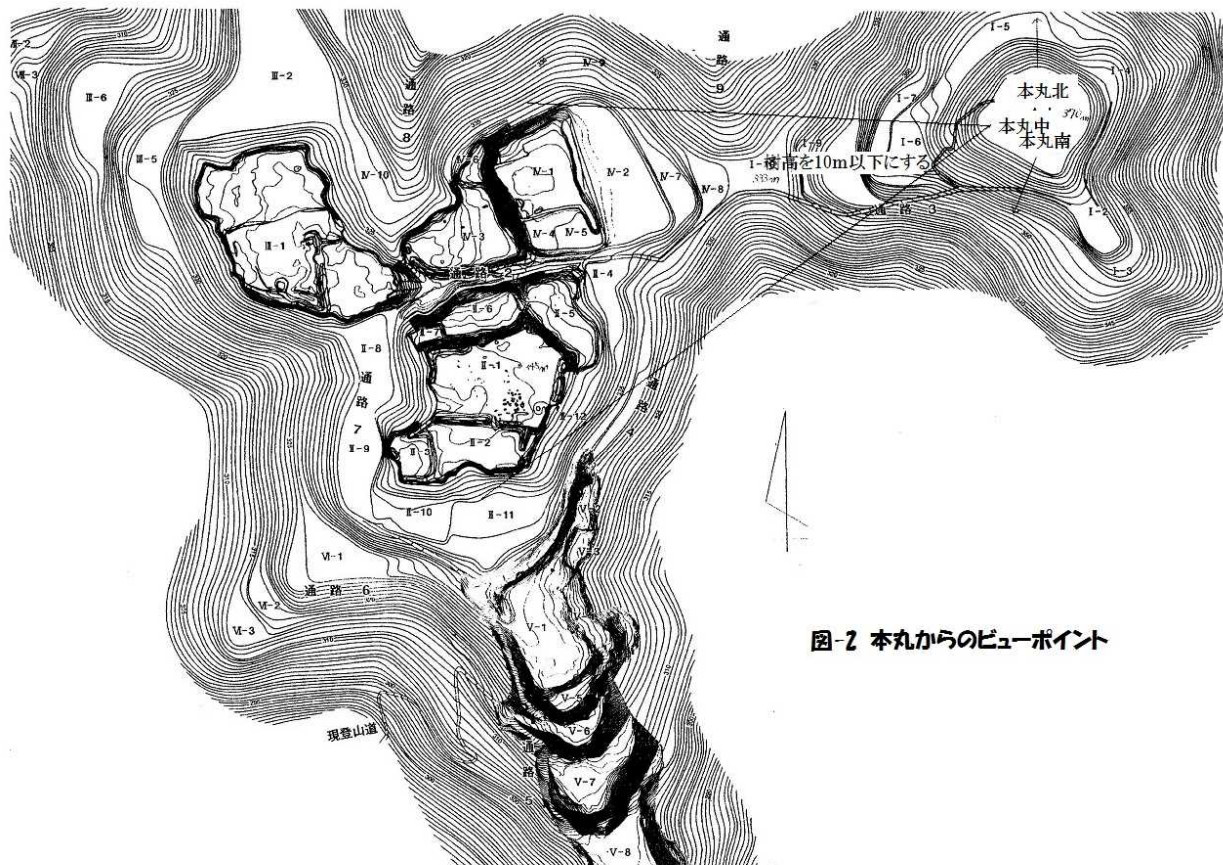


図-2 本丸からのビューポイント